

ベトナムの村落と農家経済 ー北部2ヶ村における家計調査よりー

岡江恭史

ベトナム農民の行動様式に関しては、1970年代後半にアメリカの政治学者によって行われたモラル・エコノミー論争が有名である。James C. Scott が "The Moral Economy of the Peasant" (1976) で、農業生産の不確実性にさらされているベトナム農民は平均所得の増加より危険を回避する行動を取ると論じている。これに対して、Samuel L. Popkin は "The Rational Peasant" (1979) で、ベトナム農民は自らの利益の最大化を第一義的な関心事として行動していると反論している。

上記の問題点を踏まえて本報告では、報告者自身が 2004 年から 2005 年に行った家計調査のデータを用いて現代のベトナム農民が市場経済化に対応してどのような行動をとっているかを報告した。調査地として北部農村の中から市場アクセスにおいて対照的な2ヶ村を選んだ。調査地の一つである CD 村は、首都ハノイと北部第二の都市で国際貿易港であるハイフォン市を結ぶ国道5号線が近くを通り、さらにユネスコ世界遺産にも登録されている景勝地ハロン湾や中国へと通じる国道183号線に近接している。一方 BC 村は、ベトナムを南北に縦断する基幹道路である国道1号線からはずれている。この両村における家計調査の結果、以下のことがわかった。

両村ともに 1993 年に一人あたり均等に農地の使用权（貸与・相続権も含む）が各農家世帯に与えられたが、その後農地の集積はほとんど起きていない。ごく一部の世帯が親戚や近隣世帯に無料か無料に近い賃料で水田を

貸しているが、ほとんどの世帯はたとえ他の就業機会に恵まれ機会費用が大きくなっても、家族が食べるコメは自ら栽培し、農民は決して水田を手放そうとはしない。ベトナム政府自身は農地を集積させる政策を推進しているが、農民はそれに応えようとはしていない。背景として、飢餓の頻発した歴史と外の世界に対する不信感があるのではないか。つまり、コメ栽培は生存維持のための社会保障のための経済行動であり、これはスコットのベトナム農民観（危険回避を第一とする行動様式）に合致する。

反面ベトナム農民は、市場経済化に敏感に反応する『合理的農民』（ポプキン）としての側面もある。それは、CD 村の場合は養豚・養鶏に、BC 村の場合は野菜栽培に顕著に現れている。これらの生産の世帯収入に占める割合は大きく、一部農家による生産の集中も起きている。例えば養豚部門では、BC 村ではほとんどの農家が貯蓄の一種として肉豚を回転式に肥育している。CD 村では、市場経済化の流れの中でこういう農家は激減し、より規模を拡大したい農家が養豚専門農協を設立して飼料の共同購入と外来品種の導入による企業的経営を進め、少ない手間と費用で養豚を継続する農家が母豚のみを飼養して子豚の販売に特化するという、二極分化が進行している。つまり養豚経営が市場経済化の流れの中で徐々に社会保障のための経済行動から利潤追求のための経済行動へと変化している。

以上のことから、スコットの行動様式（社会保障型経済）とポプキンの行動様式（利潤追求型経済）は、現代のベトナム農民の中に並存していると思われる。これは、農民層が分解して階層ごとの経済行動に違いが生じているのではなく、同じ農民の中に二つの異なる経済行動規範が並存している状態である。